

堺更紗と漆器

堺市博物館 蔵

古くからシルクロードを通してヨーロッパと中国は結ばれていたが、16世紀に入って南蛮貿易が盛んになった。ポルトガルによる船を使った貿易である。バスコ=ダ=ガマの船隊がアフリカ大陸南端喜望峰をまわって、インドに到達したのが1498年、ポルトガル人の日本来航は、鉄砲伝来の1543(天文12)年である。

その後、ザビエルがキリスト教を伝え、多くの宣教師が来日するとともに、ポルトガル商船が頻繁に来航するようになった。彼らのねらいは日本の銀であった。当時、わが国の産出する銀の量は莫大で、全世界の産出額のおよそ三分の一におよんでいたという。日本が銀を輸出し、生糸をおもに輸入する形の南蛮貿易がはじまったのである。

もっとも、生糸はヨーロッパ産ではなく、中国産のものである。当時、明は海禁政策をとっていて、日本と明との直接取り引きはほとんどなかった。ポルトガル船が広東や寧波あたりで密貿易を行い、得た生糸を日本にもたらし、その代わりに銀を得ていたのである。

そのころ、最大の銀の産出地は石見の大森銀山で、当時ヨーロッパで作成された日本の地図には「IWAMI」がちゃんと描かれている。

織田信長がキリスト教イエズス会の布教を許可したことで、ヨーロッパの文物もたくさん入ってきた。とくに、九州の大名たちは競うように南蛮貿易に力を入れ、南蛮文化が生活の中に取りこまれるようになっていった。

たとえば、日本語になったポルトガル語をあげてみると、食べものとして、アルヘートー(砂糖菓子)、コンベイトー、パン、サラダ、カルメラなどがあり、服飾に関するものとして、ビロード、ボタン、カルサン(袴)、サラサなどがある。それまでの日本にはボタンはなかったのも、これは服

飾革命をもたらしたといってもよいかもかもしれない。写真の堺更紗などはその典型的な例である。

ほかに、カルタ、オルガン、タバコなども、ポルトガル語から日本語になったもので、庶民生活にとけこんでいる。

ヨーロッパの文物が日本に入ってきて、それまでの日本の技術と融合していったものも少なくない。たとえば、写真の下段に見える花鳥蒔絵螺鈿洋櫃はその例で、螺鈿蒔絵の日本独特の技術が西洋の櫃にほどこされているのである。

ところで、輸入品として注目されるのは、生糸のほかに硝石があった。硝石は火薬の原料で、火薬は、硫黄・炭・硝石を調合して作るが、硝石は国内で採れず、輸入に頼らざるをえなかった。ほかに、鹿皮や鮫皮も輸入していた。これらはともに鎧や刀などに使われている。

輸出品の中心は何といっても銀で、日本では古来、銀製品、たとえば、銀の皿、銀のスプーンなど使う習慣がなく、国内での需要が全くといってよいほどなかったのも、産出された銀のほとんどは南蛮貿易によって海外へ出ていた。

その他、刀が輸出されている。日本刀は切れ味もよく、また美術品としても珍重されていたようである。美術品としては他に漆器が人気だったという。また、絵画、とくに屏風絵はヨーロッパ人にも好まれ、輸出品となっていた。屏風はポルトガル語にもなっている。ピオンボである。ちなみに、ポルトガル語になった日本語として、他に、着物がキモノまたはキマンとなっており、畳もそのままタタミとしてポルトガル語になっている。

なお、ゼンマイ式時計や地球儀、メガネ、望遠鏡など、それまでの日本にはなかったものが次つぎに入ってきて、科学的分野においても生活文化に大きな影響を与えているが、医療の世界においてもその萌芽がみられた。いわゆる南蛮医学の導入である。それまでは中国から伝来した東洋医学に頼っていたわけであるが、このころから南蛮医学、すなわち西洋医学による外科手術なども行われるようになっていく。南蛮貿易によって生活が大きく変わっていったのである。

(静岡大学名誉教授 小和田哲男)